

港湾振興便り



2025. 11

第222号

*:**

目 次

:~

1 ポートエッセイ — 通常総会を釧路市で開催 —

～ 日本港湾振興団体連合会会長(新潟市長) 中原 八一 ～

2 トピック

●稚内港港湾脱炭素化推進計画の策定について

(稚内市 建設産業部 港湾空港課)

●「第52回川崎みなと祭り」が開催されました

(関東地方整備局 首都圏臨海防災センター・京浜港湾事務所)

●全国初「自動係留装置導入ガイドライン(案)」が策定されました

～自動係留装置の導入・運用に向けて～

(北陸地方整備局 新潟港湾空港技術調査事務所)

●2025 年世界港湾会議が神戸で開催されました

(近畿地方整備局 港湾空港部)

●海洋環境整備船「いしづち」の船内見学会を行ないました！

(四国地方整備局 松山港湾・空港整備事務所)

●海上と陸上から志布志港を見学する探検隊を開催しました！！

(九州地方整備局 志布志港湾事務所)

*:**

1 ポートエッセイ ― 通常総会を釧路市で開催 ―

～ 日本港湾振興団体連合会会長(新潟市長) 中原 八一 ～

*::~

先月3日、北海道釧路市で日本港湾振興団体連合会の通常総会を開催いただいた。開催に向けてご尽力いただいた釧路港湾振興会の栗林会長をはじめ、事務局の方々や釧路市の皆様、北海道開発局の皆様など関係各位にあらためて感謝申し上げたい。ありがとうございました。議案審議が行われた総会の後、記念講演、交流会と続き、盛会裏に終了となった。

さて、涼しさを売り物にする釧路市だが、猛暑が続いた今年はさすがに観測史上最多の真夏日を更新したとのこと。それでも3日だけという。うらやましい限りである。

釧路市では官民を挙げて「笑えるくらい涼しいまち」などと銘打ち、観光や移住・定住を促進している。「涼しさ」を単なる気候の特徴ではなく、暮らし方や生き方の提案として地域活性化の柱としている。他にも日本には釧路市のように、「気候」を地域の特色や資源として生かし、文化・産業・観光に活用することで独自の魅力を発信している市町村も多い。各市町村が特色あるまちづくりに力を注いでいるのを感じる。しかしながら、地球温暖化による異常気象は、特色ある気候を「地域資源」として活用している市町村にとって、その魅力を揺るがすリスクとなり得る。地域特性に応じた適応策が求められている。

また、釧路市には日本で最初のラムサール条約登録湿地である釧路湿原が広がっている。湿原には国の特別天然記念物「タンチョウ」が生息していることでも有名である。空港も「たんちょう釧路空港」という名称だった。

新潟市もラムサール条約に登録されている「佐潟」を有しており、こちらはハクチョウ類、オオヒシクイ、マガンなど多くのガンカモ類の有数の集団渡来地である。同じような湿地帯を有する釧路市に親しみを感じた。

お互いにこの湿地を「守る」だけでなく、地域づくりや観光振興の力として生かしていきたい。

:

2 トピックス

*:**

● 稚内港港湾脱炭素化推進計画の策定について

(稚内市 建設産業部 港湾空港課)

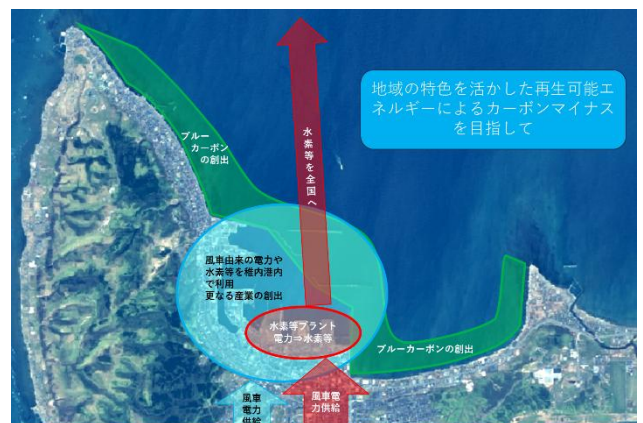
稚内港では、カーボンニュートラルポートの形成に向け、令和6年2月に港湾利用者や行政機関等を構成員とした稚内港港湾脱炭素化推進協議会を設立し、これまでに計4回の協議会における議論やパブリックコメント等を経て、本年9月26日に稚内港港湾脱炭素化推進計画を策定しました。

計画では、カーボンニュートラルやカーボンマイナスに向けた稚内港の目指す将来像として、①道北地域の再生可能・次世代エネルギーの活用・供給拠点、②ブルーカーボン生態系によるCO₂吸収源の創出、③グリーン水素等の生成拠点の3つを示し、2050年のカーボンニュートラル実現を目指し、取組を進めることとしています。

稚内港は、道北の産業拠点、離島とのフェリー基地、沿岸沖合漁業基地などとして重要な役割を担っている港であるとともに、稚内港背後圏では、全国屈指の恵まれた風況を活かした風力発電を中心に、太陽光、バイオマスなど再生可能エネルギーの導入に官民挙げて取り組んでおり、これらの地域特性を活用しながら、新たな産業の創出やGX関連産業の集積も視野に入れ、稚内港の脱炭素化を推進していきます。



第1回稚内港港湾脱炭素化推進協議会開催の様子



稚内港における脱炭素化推進計画のイメージ

●「第52回川崎みなと祭り」が開催されました

(関東地方整備局 首都圏臨海防災センター・京浜港湾事務所)

10月11日(土)、12日(日)の2日間にわたり川崎マリエン、東扇島東公園等において「第52回川崎みなと祭り」が開催されました。

「川崎みなと祭り」は川崎港の使命について市民の理解を深め、港に対する親近感を高めるために川崎市を筆頭に多くの港湾関係者が協力して1974年から毎年開催されています。

「川崎港から世界へ、未来へ。」というテーマのもと、CNPや次世代エネルギーである水素、SDGsに関するイベントもあり、川崎市がカーボンニュートラルに力を入れている様子がわかります。

関東地方整備局では、東公園会場にて首都圏臨海防災センターが基幹的広域防災拠点等の紹介パネルの展示及び、センターに保管してある重機に搭乗して写真を撮影できるコーナーを用意しました。

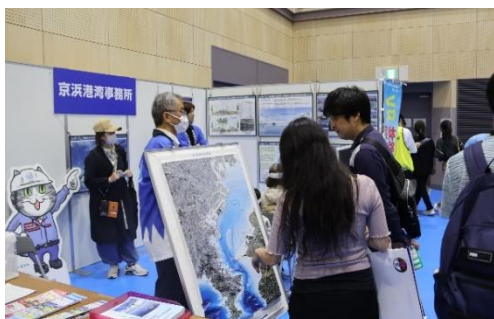
マリエン会場においては、京浜港湾事務所が川崎臨港道路事業に関するブースを出展。パネル展示やパンフレットを配布し、現在川崎港で行っている臨港道路建設の説明を行い、VRによる橋梁建設の施工ステップを体験していただきました。2日間で700名以上の方がブースに来場され、200名以上の方にVR体験をしていただきました。幅広い世代に港湾整備事業のPRができ、とてもよい機会であったと思います。



首都圏臨海防災センターのブースの様子



重機搭乗体験をする子供たち



京浜港湾事務所のブースの様子



VR体験をする子供たち

●全国初「自動係留装置導入ガイドライン(案)」が策定されました

～自動係留装置の導入・運用に向けて～

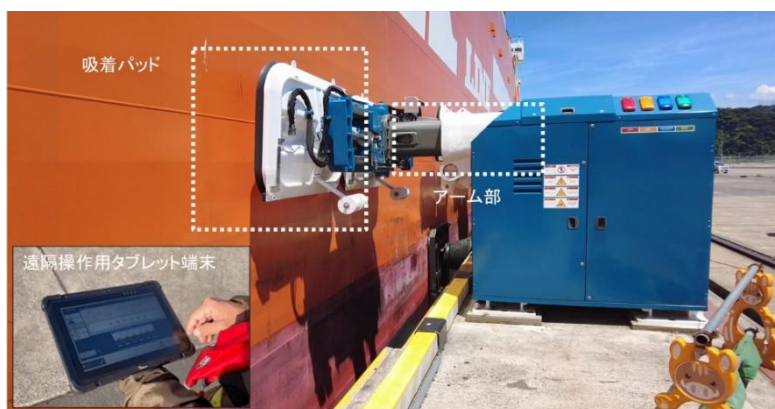
(北陸地方整備局 新潟港湾空港技術調査事務所)

従来の船舶係留方式は、主に係留索(ロープ等)を用いた方式でしたが、海外では自動係留装置を利用した離着岸が実用化されています。また、自動係留装置は、船舶の離着岸における作業時間の短縮、作業者の負担軽減、さらには係留索破断による事故の発生リスク等の低減効果が見込まれます。

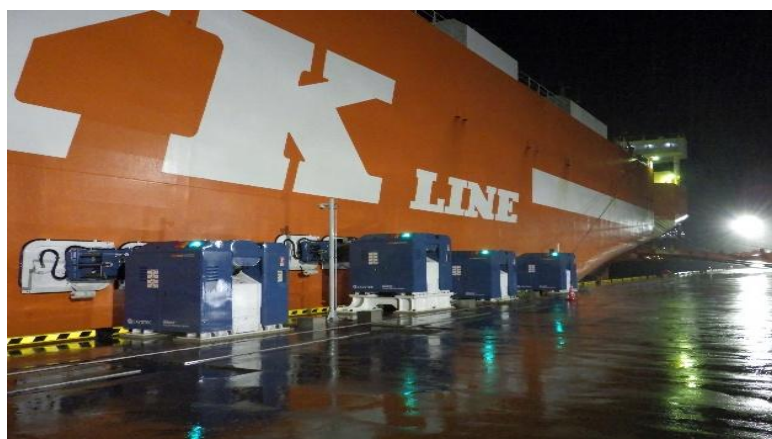
北陸地方整備局では、福井県敦賀港において国内の公共岸壁で初めて自動係留装置を試験的に導入しました。また、令和2年度より学識経験者等で構成する「自動係留装置技術検討委員会」を設置し、現地実証試験を踏まえて、同効果の検証および同装置導入ガイドラインの審議を行ってきました。

今般、これまでの検討で得た知見をとりまとめ、「吸着式自動係留装置導入ガイドライン(案)」として、令和7年10月14日に新潟港湾空港技術調査事務所ホームページにて公表しました。

今後、本ガイドライン(案)は、他港での導入検討の際に活用されることで、本技術の普及・発展に寄与することを期待しています。



自動係留装置(吸着式)



敦賀港(鞠山南地区)自動係留装置現地実証試験の様子

●2025 年世界港湾会議が神戸で開催されました

(近畿地方整備局 港湾空港部)

令和7年10月7日(火)から9日(木)にかけて、神戸市で国際港湾協会(IAPH)設立70周年を記念する世界港湾会議が開催され、世界各国より約550名の港湾関係者が参加し、「激動の時代における改革と繁栄」とのテーマを中心に様々な議論が行われました。

全世界から提出された多くの港湾に関するプロジェクトの中から先進的な取り組みを表彰するIAPHサステナビリティアワードにおいては、横浜港が「港湾脱炭素化推進計画」により最優秀賞を日本で初受賞。年次総会においては、IAPH副会長(南西・東アジア及び中東地域)として横浜港埠頭株式会社の元野一生氏が選出されました。

1952年に神戸で準備会議が行われたことがIAPH設立の契機となっており、会議の最終日にはゆかりの地である神戸市とIAPHが、港湾の持続可能な発展と世界平和への貢献を掲げた共同宣言を発表しました。

次回の世界港湾会議は来年11月、英国ロンドンで開催予定です。



IAPH マイヤー会長と日本の港湾関係者との意見交換



神戸市によるウォーターフロント再開発に関する講演



年次総会

●海洋環境整備船「いしづち」の船内見学会を行ないました！

(四国地方整備局 松山港湾・空港整備事務所)

令和7年10月12日(日)、今治港での「せとうちみなとシーマルシェ」にて、いしづちの一般公開を行ないました！

当日は3連休の中日ということで、今治港には多くの人々が来場。会場ではたこめしや鯛めしなどの「海」を感じられるブースが多く立ち並びました。

いしづちの船内見学会には、2時間半で400人を超える方にお越し頂きました。いしづちがこれまでに回収した海洋ごみを実際に見て、驚いた様子の方々がいました。今回の見学会で、海洋ごみ問題について考えるきっかけになったことを願っています。



乗船への案内



パネルでの説明



操舵室にて船長説明



甲板の見学

●海上と陸上から志布志港を見学する探検隊を開催しました！！

(九州地方整備局 志布志港湾事務所)

令和7年10月18日(土)志布志港についてもっと知ってもらうために志布志港探検隊を企画し、小学生から高校生まで約10名が参加しました。

本探検隊は海上と陸上の両面から志布志港を見学し、海上見学では志布志港の歴史や枇榔島、海から見る志布志港の紹介をし、普段見ることができない景色に参加者からは「楽しかった」「新しい発見もあった」との声があがりました。

陸上見学では①原木ヤード②サイロ・飼料工場群③ブロック製作ヤード④国際コンテナターミナルを見学して頂きました。初めて間近で見るガントリークレーンの迫力に、子どもたちは目を見張っていました。

昨年は天候に恵まれず陸上での見学のみでしたが、今年はついに海上探検も行うことができ、子どもたちに志布志港の魅力を知ってもらうことができました。

今後も多くの方々に志布志港だけでなく港湾の仕事に関心を持って頂けるように、このような活動を継続してまいります。



船上から志布志港を見ている様子



間近でガントリークレーンを見学



消波ブロックの前で集合写真



ガントリークレーンの前で集合写真

::*: 本メールマガジンに関するお問合せやご意見、また情報の送り先 :*:*:*:*:

日本港湾振興団体連合会事務局

〒105-0002 港区愛宕1-3-4

TEL:03-5776-0630 FAX:03-5776-0631

e-mail: bcf06323@nifty.com

*: